

さて壬生川で真つ先に私一人降りる。次は西條新居浜と次々と降りるのだ。「元気でやれよ。また会おう」と手を振り別れる。駅から自宅まで田圃道を独り歩く。

途中の田の中から「今もたんか。ちよつとわしが走って知らせてやる。そろそろ帰れ」と二カ月早く復員した旧友がいたわってくれた。やつと家族の待つ故郷の自分の生まれた家にたどり着いた。旧友の知らせで妹が母が田より走り帰った兄が次々と駆け寄つて抱き合うようにして、無事の復員を喜んでくれた。有り難い。母は「ヨーヨーモンタカ」と一言。次兄をビルマで戦死で失った母の一日千秋の子を思う親心。山より高く海より深いのであろう。合掌。

結婚は昭和二十三年十月。現在に至るまで二人揃つて元氣。男女女女と一男三女に孫が九人。お寺お宮老人クラブのお世話人など務めております。

元氣で帰れた私として、不幸にも敵弾にあるいは病気に尊い命を散らせて、祖国のために捧げて大陸の土となった戦友の英霊に対して、心よりの冥福を祈るばかりです。

## 陸上勤務

### 第六十二中隊奮戦記

(付・湘桂作戦)

東京都 幅 一雄

―出征した時の場所はどちらですか―

現在住んでいるところです。出征中、昭和二十年三月十日の大空襲で丸焼けになりました。

―家族の構成は、何人でお暮らしでしたか―

家内と子供(女子)二人です。

―出征されてご商売の方は―

人手も物もなく休業です。

―川口の在に疎開したのですね―

そうです。復員して東京の焼跡を確かめ川口へすっ飛びました。二十一年九月から商売を再開しました。

―復員されて、いろいろご活躍ですね―

復員した秋に「八起会」という戦友会を作り、昭和

二十五年第一回の慰霊祭を行い、ズーッと続けていきます。合間を縫い、戦死者の家を訪ねたり、小戦史を発行しました。

―入隊と編制と出征の状況をお話ください―

私の属した隊は、昭和十九年三月一日、山梨県甲府市東部第六十三部隊（旧歩兵第四十九連隊）で編制され、「宮第七八四七部隊本部」に編入されました。全員五十一名は皆充員召集による応召兵で、ほとんど妻帯者で年齢も二十六歳から四十歳ぐらいの幅がありました。湘桂作戦の要員でした。

将校・下士官も少なく、内地出発のとき、銃も支給されませんでした。漢口に到着して支給されたような状態でした。隊員のほとんどは二度目の応召で、勲七、勲八、中には金鶏勲章の保持者もありました。

本部指揮班 矢沢長太郎中尉

第一小隊長 山田兵三少尉以下一六二名

第二小隊長 篠井良顕少尉以下一六二名

第三小隊長 森川道二少尉以下一六二名

で陸上勤務第六十三中隊が編制されました。私は第一

小隊に配属されました。

湘桂作戦は戦後五十年の今となつては、正式の戦史、大隊・中隊単位の戦史、個人の戦記等で語り尽くされているので申し上げませんが、

一、米軍飛行基地の覆滅

二、南方資源輸送手段の確保

三、米軍の上陸に備え軍の集結

と時期により微妙に目的が異なっていますが、大東亜戦争最後の大作戦だったわけです。

―任地まで、どのように行かれましたか―

昭和十九年三月三日動員完了。三月四日、甲府出発。名古屋、下関、門司に着き一泊。三月六日、輸送船「宇賀丸」（約四、五〇〇トン）に乗船。護衛艦なしで「鳴尾丸」と同航、上海経由、南京に三月十四日に着きました。三月二十五日南京発、貨車で蕪湖駅（ウホ）に到着したのが翌日でした。その元日本領事館宿舎に宿泊し、湖北省武漢地区への徒歩行軍に備えて、準備と休養をとりました。四月三日、数十頭の馬匹の武昌までの輸送を兼ね、輓馬部隊で蕪湖を出発、百キロの行

動が始まったのです。

五月三日、武昌到着。蕪湖出発から一カ月、その間、大公館⇨東流と二日間の行程を一日で行き、しかも一日中大雨の中の難強行軍は、五十年以上過ぎた今日でも、難儀だった行軍だけに思い出される。この時サイパンで守備隊は玉碎し、戦況は日本に日一日と不利になりつつありました。

五月五日、揚子江を渡河し、五色の吹き流しと鯉幟の見える漢口へ渡り、宿舎に入る。

五月十日、各小隊は第十一軍の指揮下に入り、それぞれ配属が決まった。

第一小隊は野戦兵器廠第六一一二部隊

第二小隊は中隊本部と共に野戦貨物廠呂第六一一三部隊

第三小隊は野戦自動車廠呂第六一一四部隊

― 輓馬輸送には大分、苦労されたようですね―

何しろ馬を扱った兵はほとんどおらず、それに各班に荷車一台の割当てでしょう。装具その他食糧は皆荷車に積み、輓馬係と別に班員が挽くか押すかしました。

第一日がすんでこれはたまらないと、翌日から各小隊とも荷車に挽索を着け、これを馬に挽かせたので、二日目からは大変楽になった。しかし、どしゃ降りの中の行軍、二日行程を一日で突破する強行軍に、よく老兵が脱落せず一カ月の行軍をしたものと思う。しかし、空腹に耐えきれず行軍中、軍公路の脇の畑にいんげん豆や菜の畑などがあると、車両についている者は畑に入れ込み夕食の菜を採るやら鶏を捕えるやらの行軍を続けました。

― 漢口と岳州付近の勤務はいかがでしたか―

非戦闘部隊でしたから、湘桂作戦のための資材の収集と搬出の明け暮れでした。

呂第六一一二部隊は、一部を残し貨車で約六〇キロ南の茶安嶺駅まで行きました。

山田隊は駅から西南二キロほどの地点高橋の古谷隊に協力隊として勤務に着く。勤務内容は現地地松林その他の森林から木を切り出し、二メートルほどの長さ、幅三〇センチ、厚さ三、四センチほどの板に製材したものを三、四枚と担ぎ、駅まで搬出するのだが、途中

に小高い山があり、これを登るのが大変に難儀な労働でした。もちろん、現地の苦力クワリも使用するのだが大変な仕事でした。頂上近くに湧水があり、珍しく生水で飲めるので、争って渴を癒した。この製材は六月から始まる「一号作戦」湘桂作戦」用の資材で、駅まで搬出し貨車で岳州へ送られていました。六月中旬、岳州が陥落し、我が軍は長沙に進撃中で、敵機は通過するだけで、たまに駅付近を爆撃する程度でした。六月初めには武昌の在留員も到着し、山田隊全員でこの作業に従事しました。

食糧は主食の米と武漢地区から送られてくるメリケン粉が沢山あり、副食品は一日一度は「水とん」でした。野菜は輪切りの胡瓜で他の青物は入りません。毎日「水とん」では芸がないと、私ともう一人の炊事班員とでなた切りうどんを作り、皆に喜ばれました。山田隊のほかにも古谷隊の六〇名を入れ、全員で二三〇名で警備と作業の毎日でした。比較的多い小麦粉で田舎饅頭まんじゅう、餅代わりの小麦粉餅、たまに池を干し、草魚の三枚下し、塩焼きなどを作り隊員に喜ばれました。

七月に数台のトラックが配車され楽になりました。警備隊が引き揚げた後、製材所が襲撃され一名重傷、一名軽傷の惨事がありました。今振り返って見ると、わずか二カ月ですが、山田隊が一方所に勤務し湘桂作戦に参加したのはこの高橋だけでした。

非戦闘部隊の悲しき、岳州までは長沙・易俗河・板塘舖・衡山と、皆それぞれ勤務地が異なり、桂林でも桂林工場、馬面橋、六塘坪と別々の勤務地に着き、敗戦後に雲漢の中隊本部に帰属して初めて山田隊員皆が集結した次第です。

七月下旬、逐次茶安嶺から貨車で岳州に向かい、茶安嶺には小川上等兵以下十名が残った。その他隊員は八月初め全員岳州の荻谷隊の配属となった。命令で船又は自動車の便があることに兵器・弾薬・その他の辛領者として長沙又は易俗河へ数名ずつで出発しました。その都度、米軍機の空襲があった。洞庭湖沿岸での作業は危険極まりなかった。特に八月二十五日の岳州駅岳州の空襲は爆撃機、戦闘機二十四、五機の来襲で、多大の死傷者を出したが、我が山田隊からは一名の怪我人

も出なかつたのは天佑でした。九死に一生とはこのことだと思つた。

この岳州駅は武昌、岳州、衡陽、広東を結ぶ粵漢線の要衝で、岳州―衡陽間の鉄橋が爆破されたため岳州から船で洞庭湖から湘江を遡り、衡陽へまた陸路をトラックにより前線基地、長沙、易俗河、衡山、衡陽へと弾薬・その他の宰領に運ぶため四、五名ずつ出発しました。

八月八日には衡陽が陥落していたが、制空権は完全に敵に掌握されており、我が軍には対空砲火すらろくになく、毎日敵米軍機の跳梁は激しく、陸路、水路の別なく射撃を加えてきました。空襲の合間を縫ってトラック、船で宰領に出かけたが、犠牲者は船で出発した隊員である。航行中、敵襲を受け避難しましたが、船は沈没し、一緒に沈没した弾薬に來襲を避けながら三日も掛かり、引き揚げ、三日後に長沙に届けた隊員もいます。トラック輸送も完全に安全というわけではない。発見されたら最後、積載した全車両を破壊するし、弾薬も爆発し終わるまで爆撃、射撃を繰り返しま

した。

―貨物廠要員には一般兵科と違つた苦勞があつたのですね―

最終的には自給自足、着のみのままで、戦闘部隊、補給部隊の区別ありませんが、ずーっと縁の下の力持ちでしたね。「輜重輸卒が兵隊ならば」の戯れ歌がありました。今次大戦の敗因の最大の原因は輸送手段の欠如ですよ。食糧を送られないから「現地調達せよ」、ていのよいかっぱらいですね。これが支那五億の人民を敵に回したのですよ。儲備券で買うといつても紙べらで強制交換でしょう。石油の産地を押えても内地へ運べない。何を考えているかといいたいですね。車両で出発した者も途中、我が軍の車両が至る所で焼かれ、転覆している。道路の両側は赤肌の山で、車両どころか兵の退避するところもない。辛うじて杖を見付け、木の枝で車両を偽装し、夜間でも無灯火行進し、昼間は雨天か曇天の日しか行動しない。道路はズタズタ、橋は焼失、岳州―長沙間一七〇キロの道を二十一日間も掛けました。

携帯食糧も底を尽き、刈入れ前の粃を石臼に入れて足で棒を突き、米にして二十一日生きつないだのです。清水真吉、長谷川茂一、野浦光男、小野榮、私としらば行動を共にしたことは、今でも忘れられません。九月に入り全隊員は長沙または易俗河まで進出した。易俗河には片山軍曹以下五十名、長沙には隊長以下五十名、板塘舖から衡山に前進した秋葉兵長以下二十五名と分散勤務していました。

易俗河の隊長は十二日初め、衡山の隊員は一月十日ころ、長沙の隊長以下は一月十五日、六日ころ、七百キロほど先の桂林に向かって出発。敵機を避け疊りの日以外、全行程は夜行軍で、二月の末に桂林に到着しました。到着したのは一六二名中一三〇名ほどで、この頃既に十一名の戦死、戦病死や、四名の内地送還者を出し、ほか数名の者が入院していました。

到着して間もなくの二月十五日ころ、片山軍曹以下隊員は桂林南方三〇キロほどの馬面橋へ分遣となり、残留者は兵器廠桂林工場勤務となり、バラバラに離れてしまいました。

—いよいよ桂林ですな—

山田隊は三班に別れ分遣になりましたが、すでに後方からの補給は途絶え、すべて現地調達になった。萩谷隊でも麴を作り味噌を仕込み、大豆を探し、納豆も作ったのですが、主食そのものが不足していました。

二月中旬、片山軍曹以下五十名が桂林南方三〇キロの六塘坪へ糧秣その他の物資の徴発に行き、相應の戦果があつたのです。しかし、一名の戦死者を出しました。二月末、今度は敵襲があり、大越祝一君が負傷しました。

広西省は山岳地帯で物資も少ない貧乏な省で、その上広西モンロー主義を唱え、他所省への敵愾心は強く、郡村ごとの防衛自治し完璧に近いものでした。重慶軍より住民自衛隊の方が強いという感じで、しかもいつでも便衣隊に早変わりできます。日本軍の上層部でもこの点を考慮し、吉野機関により対広西要人工作を行つたようですが、あまり効果がなく、依然として各部隊とも糧食の確保に苦労していました。四月になり山田隊長以下二十五、六名の編制で桂林西南七キロの馬

面橋方面へ物資収集のため出動しました。集めた糶、その他は桂林（兵器廠、糧秣廠）へ送りました。

桂林地区の治安も次第に悪くなり、状況も日増しに不利となりました。七月十一日、佐藤伍長、榊原兵長、佐浦、並木一等兵、四名が苦力十数名を率い、糶その他の調達に出発しました。昼近く部落に入った途端、有力な敵に遭遇、交戦する。榊原兵長は即死、佐浦一等兵は腕に負傷、並木一等兵が本隊に急報、隊長以下十数名が救援に出動、敵と応戦中の佐藤伍長を辛うじて救出したこともありました。

この頃、すでに第十一軍の主力部隊である第三師団（幸）は南昌から九江地区まで下がっており、重火器隊もまた湖南方面に転進しており、七月初めには、桂林工場勤務員は炊事要員までも毎日対戦車攻撃の訓練で、米国製M四型戦車に対し、破鋼爆雷により一人一戦車や体当たり自爆攻撃の訓練で、兵科も補給部隊も区別がありません。また、桂林死守の命が出され、遺書を書き、髪や爪を切り、手製の封筒に入れ、身辺の整理もしました。復員して判明したことです。

どれ一つとして、まただれ一人にも届いていません。そのうち、六塘坪分遣隊、馬面分遣隊も引き揚げて来ました。多分七月二十四、五日の頃と思います。桂林工場の真田大尉指揮による十数名は撤退していません。

二十三、四日ころ、貨車又はトラック、一部は徒歩で撤退し、最後は二十八、九日ころでした。使用していた建物は破壊し、一部は焼却しました。十数名がトラックで漓江沿岸の道路に集結し、夜に紛れての撤退です。敵も我が撤退を察知し、夜間にかかわらず戦闘機が銃撃してくる。何発目かに曳光弾が打ち込まれる。その度、周囲が明るくなるのでダイナマイトを積んだトラックなどひやひやものでした。昼を避け夜間に撤退しましたが途中、疲労と栄養失調のため尾棹菊三君が亡くなられたのは返す返すも残念でした。六塘坪で炭焼のことなど、よく皆に指導してくれたものです。

八月十日ころ、後続の一部隊員のほか皆、衡陽に集結していました。八月十日、衡陽の兵器廠で勤務中、黄色葉の爆発事故により穴戸栄三、小林猪三郎即死、

高橋勝春、重傷と終戦も間近だというのに残念の極みです。

―撤収の時の心境はいかがですか―

心細いの限りです。将校以下だれも退却の戦略・戦術の知識もなければ実戦もない。一日も一キロでも敵から離脱したいの一心です。桂林から撤退中、無線からすぐ近くまで敵が追尾しているとの情報がちよくちよく入りました。我々は兵站補給部隊であるが、後尾の戦闘部隊は大変だと思いました。

復員後二十年経ち、ひよつとした機会から第十一軍の独立混成第二十二旅団の独立歩兵第六十六大隊だということが判明しました。その中に、恩欠運動を共に携えてやっている山崎純夫氏や星澤實氏がいるではありませんか。那須の会合のとき、温泉に浴しながら一晩語り明かしました。

―敗戦の報はいつ聞きましたか―

衡陽です。一部は祁陽きやうです。その時、日本は何で無条件降伏しなければならぬのか、さっぱり分かりませんでした。

―終戦処理はどうでしたか―

八月十六日終戦を聞かされ、撤退に際して車両に積んで来た弾薬、器材、ダイナマイト、錫は皆破壊し、患者は一車両に二十数名乗せ、野戦病院に収容しました。

我々は長沙地区に集結、開福寺に一時宿営し、次の命令を待つていました。九月に入り菊の紋章を削り、支那軍に引き渡し、初めて戦争に負けたんだな、との実感がわいてきました。

―抑留生活はどうでしたか―

抑留地は長沙県嘉疑郷道林橋の一農家です。満州事変以来十五年間、日本軍の行った行為に対して、支那軍及び一般民衆は、恨み骨髄かと思っていたら、蔣総統の布告以来、一部には多少の怨念の仕打ちはあっても、全般として極めて友好でした。

楽しみはいつ帰国できるかということと、少ない配給をいかに有効に食い延ばすかの工夫でした。

昼は器用な兵の作った麻雀やら将棋やらで楽しみ、夜は講談やら落語や物まねなど結構憂さを忘れさせて

くれました。作業中事故でなくなったり、栄養失調で死んだりいろいろのことがありました。帰国を目の前にしての死亡、本人も無念だったろうし、国で待っている家族のことを思うと泣いても泣ききれません。天命ともいうべきでしょうか。

十二月十五日、兵器廠から中隊本部へ復帰命令が出て、峰部隊集結地の湖北省岳陽県雲溪に集結しました。雲溪に幕舎を張り幕舎生活に入りました。明けて、昭和二十一年一月元旦、中隊本部から配給の餅に舌づつみを打つ。

一月三日、小隊対抗新春大運動会を開催。第一小隊は三位の成績に甘んじる。

給食の質と量がだんだん落ちる。中間でピンハネさされているのかと疑いたくなる。兵の半分は農作業、大工、道路工事の手伝い、残った兵はノビルと雑草のかゆ、しかも二食で食いつなぐ毎日でした。そしていつか仲間うちでの商売が始まり、これに支那人も加わり、市らしくなってきたが、中隊長の要請で縮小せざるを得なかったのです。下痢とシラミには閉口の一語です。

四月二十日、復員時期の命令。二十一日、雲溪を出発。二十五日、漢口、鄭州を経由、南京対岸の浦口へ。途中、住民の嫌がらせや機関士のプレゼント要求にあうも帰国の前の小事と柳に風。プレゼントも小出しに与えながら五月十四日南京に到着しました。十五日上海に到着、乗船待ちの生活が始まりました。食糧は大豆と玉蜀黍で米は一粒もなかったのです。しかし、帰国を前にして不平をいうものは一人もいなかった。それに使役はせいぜい草取りと掃除ぐらいです。

六月八日、ついに乗船命令が出ました。乗船地の波止場に集合、一晚野営しました。朝起きて見て驚きました。乗船を待機している多数の邦人がいる。一旗紐も多いのだろうが、中には数十年の苦勞がリユックサツクと風呂敷包に結集している人もいます。捕虜の身を忘れて思わず同情の言葉も掛けたくなりました。

我々の乗船する船は日の丸の付いた旧海軍の海防艦「一九四号」でした。日の丸を見たとき、思わず目頭が熱くなってくるのを抑えようもなかったものです。船は六〇〇トンならずであったが、我が第六十三中

隊四〇〇ほどだけの人員で出発、機雷除けのため揚子江口に停泊、検疫の順番を待ち、雨の中、鹿児島港に上陸したのは六月十五日でした。DDTの消毒が済み、トラックで小学校へ行き一泊。

十六日、復員証明書と六〇〇円が支給され、山田隊長の挨拶の後、鹿児島駅で乗車、二昼夜がかりで汽車は十八日午後上野駅着。東京駅から足が地につかず、踊るようにして我が家に向かいました。

〔追記〕 幅さんは昭和十三年〜十四年、第一補充兵

として武口攻略に参加しておられます。